「静かにしなさい」という指導について思うこと

個人懇談会が順調に進んでいます。

お家の方々から聞かせてもらう一つ一つの声が、教室にとっても、私にとっても、大きな活力になっていることを実感する毎日です。

ある方は、私の本を１冊丸ごと読んで質問を準備して下さっていました。

ある方は、教室を参観に来られた時の感動をまっすぐ伝えて下さいました。

ある方は、なぜたった ２ 週間でこれだけクラスの様子が変わったのかについて率直に質問して下さいました。

そして、お一人お一人と話している中で、これは学年通信の中で紹介した方がよいだろうなぁという内容がいくつか出てきたので、紹介します。

懇談の中では、次のことが話題に上りました。

少なからず。

それは、

子どもたちの話を聞く姿勢が本当に素晴らしくなった。

というものです。

そして、多くの方が、なぜそのようにクラスが変わったのかについて質問をされました。

もちろん、力で押さえつけたり、叱りつけたりしたことは、ただの一度もありません。クラスが始まって ２ 週間、たったの一度も大きな声を出すことが必要な場面はありませんでした。

さらに言うと、「静かにしなさい」という言葉も私は一度も発していません。

それでも子どもたちは、話の聞き方が顕著に素晴らしくなってきています。

シーンと集中して話に耳を傾ける姿が明らかに増えてきたということです。

では、どのような指導の前提をもって日々の授業に向かっているのか。
今回は、先に出てきた「静かにしなさい」というよく学校で見られる指導についてのお話を紹介します。
この部分を紹介すれば、どのような関わりを学校で行っているかがクリアにイメージできると思うからです。
すでに実際に本でお読みになった方もおられると聞いていることもあり、手前味噌で誠に恐縮ではありますが、拙著から引用して紹介します。
少々長くなりますが、お付き合いいただければ幸いです。

ポイント①「静か」という状態を子どもたちは理解しているか

「優しくしなさい」と言われてもできない子たちがいます。
「優しく」とは具体的に何をすればいいかが分からないからです。
「丁寧にやりなさい」と言われてもできない子たちがいます。
「丁寧」とはどの程度質を上げることなのか分からないからです。
多くの人は「優しく」とか「丁寧」と聞いた場合にイメージが持てます。
しかし、一定数の人はこのイメージにおいて難しさを持っています。
だからこそ、「優しく」とはこのような行動で、「丁寧」とはこの程度の質であることを示してあげる必要があります。
人は、教わっていないことはできません。
では、「静か」はどうでしょうか。
「『音を消すこと』なのだから、それは説明がいらないだろう。」
そう思った方も居るかもしれません。
しかし、これもイメージが持てない子がいます。
もっと言うと、「静か」のイメージは子どもによってバラバラです。
一切の音が無い完璧な静寂状態を「静か」と思っている子がいれば、喧噪状態から少しでも音量が下がれば「静か」と思っている子がいて、音声だけでなく行動もすべて抑制しなければ「静か」とは言えないと学習してしまっている子もいます。
その状態で、多くの大人は言います。
「静かにしなさい」と。
そして、教師の思う「静か」に到達していない時は二の矢が飛びます。
「何回言ったらわかるの！静かにしなさい！」
こうした指導がなされた時、たいていの場合、教室には次のように思って

いる子たちがいます。
「静かにしたのに何で怒られるの」と。
さっきの、喧噪状態から少しでも音量が下がれば「静か」と思っている子たちや、ヒソヒソ声量を抑えて話すぐらいならば「静か」から逸脱しないと思っている子たちが教室には一定数いるのです。
その子たちからすれば、「静か」にしたのに何故という疑念がわきます。
そして、子どもたちの認識によるズレだけではなく、教師の指導によるズレが悪循環を生んでいるケースも少なくありません。
例えば、「静かにしなさい」と指示を出して授業を進めるシーンを思い浮かべてください。
ざわざわしていた教室が、ある程度静かになってから、教師が話をし始めるそのシーンです。
よく見られる教室の風景だと言えるでしょう。
ここで重要なのは、「ある程度」というところです。
今まで騒がしかった教室が、“ある程度”静かになってから教師が話し始めると、次のような隠れた学びを子どもたちは獲得します。
「先生の言う『静か』は、少しぐらい話していても大丈夫なんだ」
「ちょっとボリュームを落とすのが、『静か』ってことね」

いわゆる、「ヒドゥンカリキュラム」と呼ばれるものです。

ヒドゥンカリキュラムとは「教える側が意図するか否かにかかわらず、学校生活の中で子どもたちが自ら学び取っていく内容」のことを指します。
この“ある程度”の静けさが、毎回ほとんど変わらなければ、さしたる問題にはつながらないかもしれません。
しかし、“ある程度”なのですからやはり日々微妙な誤差が生じます。
教師の機嫌がいい時にはいつもより「静か」が大目にみてもらえて、機嫌が悪い時には極端な「静か」を求められたりすることがあります。
こうなると、ますます子どもたちの中の「静か」は混迷を極めます。
その状態で、多くの大人は言います。
「静かにしなさい」と。
ですから、本当に静かにさせたいのであれば、「静か」をまず明確に教える必要があります。

例えば、私は次のようにします。

視写の学習等で、全員がシーンとした状態になった時に極めて小さな声で次のように伝えます。
「みんな、顔をあげてごらん。今、誰も話をしていなくて、鉛筆が動く音しか聞こえなかったでしょう？とても美しくて素敵な姿でした。これが『静か』っていうことなんだよ。」
こういう話をすると、教室内にハッとした表情をする子が数名います。
つまり、「静か」の状態を初めて知ったのです。
今までは、知らなかったのです。
なぜなら、教えられていなかったからです。
これをせずに「静かにしなさい」と叱るのは、「教えず叱る」の状態だといえます。
反対に、『静か』を教えてから、
「誰かが『静かに』っていう言葉を使った時は、今の姿にするんだよ。」
と教えてあげると、前回習った物差しを生かして「静か」を体現できる子が増えます。
さらに、教えたことを覚えている子を、次回は褒めることが出来ます。
これが「教えて褒める」指導です。
もし指示をしてできなくても、「静かとはどういう状態でしたか？」とまずは確認すればよいでしょう。
大切なのは、「静か」という状態が明確に教えられ、それがクラス内で誰しもがわかるように共通理解が図られているかということです。

ポイント②静かにすることの「正当性」を理解し納得しているか

「静か」という状態への共通理解が図られたとして、次に確認する必要があるのは静かにすることの「正当性」です。
正当性が感じられない場合、つまりは子どもたちが納得できていない場合、あらゆる指導は効果が半減します。
半減どころか、まるで入らないこともあります。
“半減”で済めばまだよい方で、いらぬ反発や反抗を招き、関係を壊してしまう事すらあります。つまり、良かれと思ってしたことが裏目に出てマイナスをもたらすことがあるということです。
それほどに、この正当性や納得感は大事です。
以前担任した子の中に、いわゆる「やんちゃくん」がいました。

話を聞いていなかったり、チョロチョロ動いてしまったり、話してはいけない場面で話していたり、４年生まで多くの注意を受けてきた子です。
その子を５年生６年生と続けて担任しました。
2 年間教室で共に過ごした後、彼は、卒業文集に次の言葉を綴りました。

３～４年生の時、おこられたとしても、

「そういう事はやめなさいよ。」

と注意されていた。だけど僕は、「なぜやってはいけないのだろう？？」と思っていた。だから、注意されてもすぐに繰り返してしまっていたのだ。

だが先生が変わって、やってはいけない事を僕がやったら、

「そういう事はやめなさいよ。そういう事をやる事は～～～～～」

という風に注意されるようになった。

だから、「そうなんか」と思って、そういう事をしなくなった。

要するに、指示や注意の「趣意」を語っているか否かという話です。
そして、その趣意の正当性が伝わり、納得ができたことによって行動が改善されたということを彼は伝えたかったわけです。
卒業文集に書くくらいですから、彼にとってはよほど印象的な出来事だったのでしょう。ここまでお読みいただければ想像できるかもしれませんが、彼を担任してから日を追うごとに注意や指導の数は減りました。なぜなら、彼自身が納得し、すすんで行動を省みて改善していったからです。
「静かの正当性」に話を戻します。
教師という職にある人は、ついつい「静かにしなさい」という指導を連呼しがちです。
しかし、その全ての場面に「静かにしなくてはならない正当性」はあるでしょうか。一つ一つ思い浮かべてみると、疑問符がつく場面もあるのではないのでしょうか。

「何となく静かにさせた方がよい気がする。」
「教室が騒がしいと他の先生方にどう見られるか不安だから…。」
「学校での勉強とは静かにさせるものだから。」
など、思い込みや気分や不確かな慣例によって静かにさせられた側が、正当性を感じ、心から納得して行動を改善するかといえばこれまた疑問符がつきます。
要は、何だか分からないけど行動させられているという状態ではなく、どんな目的や意味があるのかを理解することが大切ということです。
指導された内容や行為の意味を理解しているのと、理解していないのでは、教育効果はまるで違ってきます。そして、理解からすすんで「納得」の域まで達したならば、劇的な改善も期待できるようになります。
行為の意味を理解し納得していると、「考え」や「精神」が安定します。
反対に、「何だか分からないがやる」という状態は、「考え」も「理解」も不安定です。この状態に慣れると、「何も考えないで先生に言うとおりに行動さえしていればいい」と、不安定な状態をそのまま受け入れる受け身な姿勢が身についていってしまします。「指示待ち状態」「思考停止状態」を作っていく土壌であるともいえるでしょう。
これも、一つの悲しいヒドゥンカリキュラムといえます。

では、どうやって正当性を伝えて納得させるか。
私は、大きく３つの段階で教室の“音レベル”を調節できるように、子どもたちに伝えるようにしています。

レベル１　つぶやき、ひらめき、相槌、相談などの音声は可。

レベル２　基本的に無音状態を保つ。私語は厳禁。

レベル３　完全な無音状態を意図的に作る。

通常の授業は「レベル１」で進めています。
つまり、音を出そうが声を出そうが基本的に認めています。
ここは誤解を招きたくない所なのですが、授業と関係の無い自由な会話を容認している訳では決してありません。というか、そういう隙や暇を与えていないという方が表現としては近いです。
授業の本筋と関係の無いフリートークは、得てして授業の空白から生まれ

ます。空白も「授業における必要な余白」なら良いのですが、単に授業の進め方の不備による空白が毎回生じているのならば、まずそっちを改善していくのが先だと思います。

その上で、授業の本筋から逸れないならば、むしろ音声は学びに必要な存在です。音読もしますし、発表も促しますし、質問も相談も行うでしょう。何なら、「計算手順を唱えながら書きましょう」「書き順は常に言いながら漢字練習をします。」のように声をあえて出し続ける場面も意図的に作るようにしています。授業中の自然な音声の発出は基本的に認めている状態、これがレベル１です。

レベル２は、２７ページで示した状態の「静か」です。

鉛筆が動く音や、教科書やノートのページをめくる音など学習に必要な最小限の音のみを認める状態です。

これは、主に作業や活動に“没頭”させたい時に使います。

例えば、視写、絵画、工作、書写、作文、読書などの活動です。

やることが分かっていて、やり方も分かっていて、あとはその活動に没頭するのみという場合に適用するとよいでしょう。

趣意説明の仕方としては次のようにしています。

映画館に行ったことがある人？（子どもたち挙手）

映画を見ている時は声を出してはいけないことになっています。

なぜでしょう。（映画の邪魔になるから）

そう、映画を見ることを邪魔しないために、みんな静かにしています。

図書館に行ったことがある人？（子どもたち挙手）

図書館では声を出してはいけないことになっています。

なぜでしょう。（読書の邪魔になるから）

そう、本を読むことを邪魔しないために、みんな静かにしています。

今から「習字」をします。

字を集中して書く世界に入り込み、字を書くことを楽しむ時間です。

映画館や図書館のように、他の人の時間を邪魔しないために声は出しません。一人ひとり、字を美しく書く時間を思い切り楽しみましょう。

あてはめる言葉は「絵を描くこと」、「作文を書くこと」、「工作をすること」でも代用可能です。

全員の納得が得られて、レベル２の状態が自分たちでキープできるようになると、教室には知的な没頭タイムが生まれるようになります。

尚、この時間を生み出すためには、「やること」と「やり方」が明確に分かっている必要があります。

そうした意味でも、事前の範の示し方や説明の仕方を工夫することは極めて大切な意味をもちます。

レベル３は、音や声だけでなく動きすらも抑制する状態です。

日々の学校生活ではあまり使うことはありませんが、この状態を実現できると、レベル２の状態を作ることも容易くなります。

どんな活動でもそうですが、一段上の課題に取り組んでいると、それより難度の低いことには取り組みやすくなるものです。

全ての音や声を出さないことはかなり難度が高いですが、これが出来る集団は音の調節が自在にできる集団であるともいえるでしょう。

「音量０」が自分たちの意識で自在に実現できるのですから。

とはいえ、これを強制的にさせることは非教育的です。

可能ならば、主体的な楽しさを伴う活動を通して教えたいところです。

そこで私は、音楽の時間を活用して「無音の時間」を教えています。

音が有る状態を楽しむのも音楽ですが、音が無い状態を楽しむのも音楽です。その証拠に、「休符」には音がありません。でも、休符も大切な音楽の要素です。

今から、その「無音の時間」を作ってみましょう。

動きを止め、声も出しません。

すると、教室内からは音が消えます。

そして次の瞬間、教室の外から聞こえてくる音が微かに聞こえるようになります。これは、音を消さないと聞けない音です。

教室の中に「無音」を作り出し、遠くの音に耳を澄ましてみましょう。

音楽の授業の終わり１分間などでやることが多い取り組みです。
子どもたちは、この「無音の時間」が大好きです。
じゅうたん敷きの教室ならば、座る場所や姿勢も自由として思い切りくつろがせます。そして、目を閉じさせた状態で無音の時間がスタートします。子どもたちは、恍惚の表情を浮かべながらその時間を楽しみます。
この無音空間を意図的に作れるようになると、学年全体で集まった時でも、校外学習でどこかに出かけた時でも、「無音の時間を楽しみます」という指示が成り立つようになります。
以前、５年生の時に荒れがちだった学年を６年生で担任した時のことです。
クラスの担任業務と合わせて、私はその学年４クラスの音楽を担当していました。その学年が、久しぶりに一堂に会した時のことです。集会が始まるまで、準備が整うのを待つ時間が数分ありました。私は、学年全体に小さく指示を与えました。すると、１５０人全体が途端に静まり返りました。「静か」どころの騒ぎではありませんでした。これだけの人数が集まっているのに、一切の音が無くなったのですから。
しかも、目を閉じる子や自然と笑みを浮かべる子もいます。
その姿を見て、前年度からその学年を担任されている先生が驚いて「さっき、なんて指示したんですか！？」と質問に来ました。
もちろん、私は次の一言だけを伝えたのです。
「無音の時間を楽しみます」と。

ここまで静かにさせる正当性と音のレベルについて書いてきました。
子どもたちが「なるほどその為にこの音の状態にするのだ」という目的や意味が理解し納得できていると、行動改善は一気に進みます。
裏を返すと、静かにさせなくてもいい場面ではできるだけ自由にさせてあげることで、オンオフの折り目がハッキリつくようにもなるでしょう。
日ごろは自然な音声の発出を認めているからこそ、そうではないレベル２やレベル３に向かう時の心構えも整いやすくなると思っています。

・「静か」という状態を子どもたちは理解しているか
・静かにすることの「正当性」を理解し納得しているか

教室に静けさをもたらしたい時の大前提２つについて述べました。
この２点が達成されているならば、おおよそ教室内における「静か」の状態は作り出せるようになると思います。
過去に、教室内の騒がしさについて相談を受けたケースにおいて、上記の前提を２つとも満たしているクラスはありませんでした。
いずれも、「静か」という状態が不明瞭であったり、静かにすることの「正当性」が語られていなかったり、子どもたちが納得していない状態が見られました。

ポイント③具体的な指示を出し、毅然とした評価を

では、上の前提が満たされている上において実際にどのように指導するのかというと、私自身はほとんど「静かにしなさい」という指示は出しません。先の「無音の時間を楽しみます」のように別の指示でも「静か」は実現できますし、静かにさせたい時に「静かにしなさい」という指導をするのは、あまりに当たり前すぎるとも思うのも理由の一つです。
子どもたちは、恐らく何十回、何百回と大人からこの小言を言われています。それだけ形骸化している言葉でもあるでしょうし、「A させたい時に A と言う」のは教育のプロとしてもあまりに芸が無いとも思います。
何より、「静かにしなさい」という指示は行動目標になりえないのです。
デッドマンズテスト（死人テスト）という行動分析の指標があります。
「死人に出来ることは、行動目標にならない。だから行動が変わらない」という原則がそこには存在します。ですから、「静かにしなさい」だけでは行動が変わりにくいのです。「代わりにどんな行動をすればよいか」が分からな

いからです。行動変容を起こすためには、何らかの“行動”や“作業”を伴わせる必要があります。
　例えばこんな風に。
　「鉛筆以外の音は消してノートに写してごらん。」
　「口を閉じて目で教科書を読んでいきなさい。」
　「音を立てずにそーっと起立。」
　具体的な行動目標があると、動きがクリアに変わります。
　①「静か」という状態を理解し、
　②静かにすることの「正当性」に納得をし、
　③「具体的な行動」を伴う形で指示を出したのならば、
　あとは、「褒めてやらねば人は動かず」です。
　単純に褒めることばかりを指すわけではなく、これは「評価」を与えることです。誰が出来ていて誰が出来ていないかをはっきりさせることです。
　「しゃべっている人は立ちます。」
　私のクラスでは、この言葉が合図になっています。
　「静か」を理解していて、「なぜ静かにいまする必要があるか」も分かっていてもついつい口を開いてしまう場合があります。その時に気づかせてあげる意味で「しゃべっている人は立ちます」と伝えています。これを聞いた子はその場に立ち、口を閉じたら座ります。これを出来るまで繰り返します。
　ここで大切なのは「徹底」です。“ある程度”で済ませてしまうと、先に書いた通りヒドゥンカリキュラムによってずっとその状態が続いてしまうからです。語気は特に荒げる必要はありませんが、もう少し毅然と言いたい時は、「しゃべっている人は起立。」や「しゃべるは立つ。」のように言葉を短く削って端的に伝えるのもおすすめです。
　徹底の段階を経ると、いつしか子どもたちだけで「静か」が体現できるようになっていきます。その時にふと思いついたように「褒める」のです。
　「４月に出逢った頃は、こんな風にシーンと集中した空気を作ることは難しかったけど、今みんなはそれが出来るようになりましたね。とても美しくて素敵な姿だと思いました。成長しましたね。先生はとてもうれしいです。」
　集中した雰囲気を壊さぬようにささやくように伝えるのがおススメです。
　次第に、子どもたちは「静か」が「心地よい」ことを体感するようになります。ここまでくると、何度も「静かにしなさい！」と叱り続ける学級とは対極のような姿が実現できてきます。（後略）

やや長くなりましたが、どのような指導を経て子どもたちの「話の聞き方」が変わったのか、イメージできたのではないかと思います。
ここまで書いた通り、「静かの状態を教えること」もやりましたし、「正当性を納得感を持って理解できる」ように言葉も尽くしてきました。
そうして、一つ一つの対話を通して、子どもたちが自らの意志で聞き方を少しずつ変えていっているのが現状なのだと思います。
そのようにして、教室には豊かな静けさがもたらされるようになりました。

ある子のお家の方が、懇談会で次のことを教えてくださいました。
「うちの子が、『先生の全部の話が納得できる』って私に何度も聞いた話を教えてくれるんですよ。」
私も今までもこれからも発展途上ですし、趣意の伝え方についても毎年ブラッシュアップを続けているところですが、それでもその言葉が少なからず届いていたことが分かり、とても嬉しい気持ちになりました。
これからも、よりより言葉のかけ方、対話の仕方を目ざして、私もまた努力を重ねていきます。

☆↓読者ページはこちらから↓☆投稿、お待ちしております！
https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit